

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0511 ◆◆◆

18/11/28

【 12月相場は「ドル高やや有利」、「年間最小変動幅」の行方は!? 】

11月 は本日を含めて残り3日、今年もついに1ヵ月となった。そうしたなか、今回の当レターでは恒例となった過去の経験則に基づいた月間相場見通し、タイミング的には若干早いですが12月相場の予想をレポートしてみたい。

調べてみると、過去の12月相場は取り敢えずドル高・円安に振れるケースが少なくないようだ。先週レポートしたように、今年はずいぶん「年末をにらんだ需給要因がタイト」ーとされるだけに、この先ドル高の進行が期待できるのかもしれない。果たして、日経新聞がかつて懸念していた「変動相場制以降で年間を通じた過去最小変動幅」を脱することが出来るのだろうか!?

◎値幅そのものは大きくない傾向、一方向に偏った変動も少なくない

10月31日付の当レターで、筆者は経験則をもとにした11月相場見通しについて、「ドル高有利、とくに米中間選挙実施年は傾向顕著」ーと指摘した。まだ本日を含めて今月も3日を残しているため、何とも言えないが、このまま11月相場が終われば、月足は辛うじて陽線引けとなる。つまり、的中したと言ってもよいだろう。

ただし、もうひとつの特徴として「月間の変動幅が比較的大きい」と指摘していたが、こちらは「大外し」か。27日終了段階で、11月の月間変動幅は2円に達しておらず、「大きい」どころか、逆に今年初の月間最小変動幅を更新しそう。ちなみに、月間変動幅が2円未満というのは2014年6月(1.56円)以来の出来事だ。

さて、そんな11月相場を踏まえたいうで、経験則の観点から今年最後12月相場について考えてみたい。まずは、先でも記述した戦績について、1990年以降昨年まで過去28年間を振り返ってみると、勝率は17勝11敗となっている。極端に偏っているわけではないものの、それでも6割強の確率でドル高・円安が有利と言えそうだ。

一方、12月相場について「ドル高に振れやすい」以外で、別に「特徴」がないか調べてみたところ、あと2つほど興味深い事象がわかった。

順を追って説明すると、ひとつは「値動きそのものはさほど大きくない」ということで、年間を通してあまり動かず値幅の乏しい月になることが多い。たとえば、昨2017年はその典型であり、月間変動は2.35円。昨年の年間変動幅12位の最下位に終わっている。また、2011年は月間を通じたレンジがわずかに1.34円にとどまったが、これは変動相場制以降を振り返っても月間の過去最小クラスの変動だった。

12月相場のもうひとつの特徴としては、「一方向に偏った値動きを辿り易い」ということも意外に多い。これはセオリーに沿ったドル高ではなく、逆のドル安方向へと動いても、おおむねそうした傾向がうかがえる。実際、2015年は経験則的に有利なドル高とは逆方向であるドル安へと動いたのだが、その値動きは「月初高の月末安」、1ヵ月を通じて緩やかな右肩下がりをたどったことが観測されていた。

これは、クリスマスや年末・年始をにらみ、流動性が低下するなか、ヘッジファンド投機筋や資本筋が月の初めはともかく、後半にかけては新年を意識した投資スタンスへと傾斜するだけに、1月以降の相場変動が年内に「先食い」されるためであるのかもしれない。

なお、過去のニュースを調べた場合、12月は金融それも「為替」に直結して重要な事件が起こることが多いようだ。幾つか例を挙げると、「日本が金本位制を停止(1931年)」「スミソニアン合意(1971年)」「豪ドルが変動相場制へ移行(1983年)」「韓国が完全変動相場制へ移行(1997年)」ーなどとなる。

また、火山の噴火や地震といった自然災害が多発する傾向があるほか、年末らしく(?)来年へと越年できない企業も多く聞かれ、1998年の「日債銀破綻」のように、有力とされる企業倒産も過去には数多く観測されていた。毎年確実に起こることではないが、今年に関しても、それら事象についてしっかりと注意を払いたい。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

